



Rimpa Exhibition

SUZUKI KIITSU

STANDARD-BEARER OF THE EDO RIMPA SCHOOL



琳派展19

鈴木 其一

江戸琳派の旗手

プレスリリース

2017年 1月3日[火]－2月19日[日]

前期 1月3日[火]～1月22日[日] 中期 1月24日[火]～2月5日[日] 後期 2月7日[火]～2月19日[日]

細見美術館

鈴木 其一

江戸琳派の旗手

2017年 1月3日[火]ー2月19日[日]

前期 1月3日[火]～1月22日[日] 中期 1月24日[火]～2月5日[日] 後期 2月7日[火]～2月19日[日]

開催趣旨

すずき きいつ

鈴木其一 (1796～1858) は江戸後期に、江戸琳派の優美な画風を基盤にしながら、斬新で独創的な作品を描いた画家として近年大きな注目を集めています。その其一画の全容を捉え、豊穡な魅力を伝える初の大回顧展を開催いたします。

江戸初期の京都で俵屋宗達(17世紀前期に活躍)が創始した琳派は、尾形光琳(1658～1716)により、江戸時代絵画の中でも最も華麗な装飾様式として確立されました。光琳の約100年後に、江戸の地で琳派の再興を図ったのが酒井抱一(1761～1828)です。抱一は京都の琳派様式からさらに写実的で洗練された画風を描くようになり、その新様式は後に「江戸琳派」と呼ばれています。

抱一の一番弟子が其一です。其一は一門の中でも圧倒的な存在感を示し、その作風は次第に師風を超え、幕末期にかけて大きく変容を遂げます。特に30代半ばから40代半ばにかけてはダイナミックな構成や明快な色彩を多用、新たな其一様式が築かれました。さらに晩年にはより挑戦的で自由な作風を開き、近代を予告するような清新な作品も少なくありません。

本展では抱一画風を習得する門弟時代、躍動感溢れる作風を次々と手掛けた「噲々」時代、息子の守一に家督を譲り、「蒼々」と称した晩年と、其一の生涯と画風の変遷を丁寧に追います。また其一は趣向に富んだ「描表装」による遊び心あふれる作品を多く手掛け、節句に因む独創的な優品も多く描きました。本展は江戸画壇を豊かに彩った其一画の魅力とその展開を、存分に堪能していただける展覧会となりましょう。

《アメリカ・メトロポリタン美術館蔵「朝顔図屏風」はサントリー美術館のみ出品しました。》



(左) 鈴木其一「夏宵月に水鶏図」 一幅 個人蔵
(中) 鈴木其一「風神雷神図襖」 八面 東京富士美術館 ©東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPPartcom
(右) 鈴木其一「鶏に菊図」(部分) 一幅 個人蔵

展示構成

第1章 誕生 ～抱一門下の秀才～

其一は一説に寛政8年(1796)、江戸中橋に紫染め職人の家に誕生したと伝えます。文化10年(1813)、数え年18歳で抱一入門。4年後に兄弟子で酒井家家臣の鈴木蠟澤^{れいたん}の急死を受け、その姉(一説に妹)と結婚して鈴木家の家督を継ぎました。

当時は抱一の隠居所(後の雨華庵)を画塾として多くの弟子が集っていましたが、其一は早くから師抱一の厚い信頼を得、重要な仕事を任されることも多かったようです。師弟の合作も度々行われ、まさに一番弟子として最も抱一に近い存在でした。

第1章では、其一が抱一に師事した文化10年から文政年間末期(1813～1829)頃までの作品を展示します。これらの初期作品からは、抱一譲りの伸びやかで美しい花鳥図はもとより、後に大きく開花する大胆で力強い作風の萌芽、また其一が既に幅広い画題を手掛けていたことなどがうかがわれます。抱一に出会い、濃やかな師弟関係を築いたことが 其一の大きな足掛かりとなりました。



鈴木其一「雪月花三美人図」三幅対 静嘉堂文庫美術館
© 静嘉堂文庫美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

第2章 躍動 ～其一様式の確立～

其一が33歳の時(文政11年、1828)、師の抱一が没し、其一は大きな転機を迎えます。抱一の正式な後継者は、抱一の養子で雨華庵を継いだ酒井鶯蒲^{おうぼ}(1808～1841)でした。其一は12歳年下の鶯蒲を支えつつ、次第に抱一画風を離れ、其一独自の作風を展開していきます。その傾向は其一の30代半ばから40代半ば頃まで「噲々^{かいかい}」という号を好んで署名や落款に使った時期に顕著に見出すことができます。



鈴木其一「三十六歌仙・梅図屏風」八曲一双 個人蔵

この時期に其一はさまざまな試みを行いました。その中でも著しく躍動感に溢れるのが宗達、光琳の作風を意識しながら大胆にアレンジした作品です。

「風神雷神図襖」(東京富士美術館)は宗達以来琳派の得意とした画題ですが、其一はこれを襖8面に淡彩で描き、大画面への再構成を成し遂げました。

明快で鮮明な画風に意欲的に取り組んだ其一は、もはや抱一の画風に囚われることなく、新たに其一様式を確立したといえましょう。



鈴木其一「雨中桜花紅楓図」双幅 静嘉堂文庫美術館
© 静嘉堂文庫美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

第3章 挑戦 ～絢爛たる軌跡～

其一は40代の後半には家督を長男の守一(1823～1889)に譲り、その頃からさらに多様な作風へ挑戦し続けていきます。「菁々」と号した晩年の約15年間、其一の筆勢は留まることはありませんでした。

「藤花図」や「朴に尾長鳥図」(ともに細見美術館)などの諸作品は、琳派風ながら写実性も兼ね備え、清新なその作風は近代日本画を予見するかのようです。

一方、描表装による節句掛や物語絵など、趣向に富んだ美しい作品も、其一らしい機智に富み、多くの人気を得ました。

安政5年(1858)9月10日、其一は63歳で生涯の幕を閉じます。大名家や豪商に愛され、思いのままに筆を揮った晩年。幕末に向かう動乱の江戸で、其一の活躍は最後まで絢爛な軌跡を描き、人々を魅了し続けました。



鈴木其一「富士千鳥筑波白鷺図屏風」二曲一双 個人蔵

第4章 継承 ～其一派と江戸琳派の展開～

其一は多くの抱一門弟と競い合い、江戸琳派を盛りたてました。また其一自身も弟子の育成に力を注ぎ、江戸琳派の中でも「其一派」というべき最大勢力を築き上げます。江戸琳派は明治維新後も存続しますが、その継承には其一派の存在が大きく寄与していました。

抱一や其一の作品は、夏目漱石の小説にも度々取り上げられるなど、既に明治期より江戸の美意識を伝えるものとして高い評価を得ていました。江戸琳派の後継者たちはその残影を伝えるべく、近代社会にふさわしい変容を遂げつつ昭和中期まで命脈を保ったのです。

第4章では其一を取り巻く抱一門下の他の画家や、其一派の作品を取り上げ、近代以降の江戸琳派の展開を辿ります。



酒井鶯満「扇面散図屏風」(部分) 二曲一隻 東京国立博物館

展覧会概要

琳派展19 鈴木其一 江戸琳派の旗手

会 期： 2017年 1月3日[火]－2月19日[日]

前期/1月3日[火]～1月22日[日] 中期/1月24日[火]～2月5日[日] 後期/2月7日[火]～2月19日[日]

主 催： 細見美術館 読売新聞社

協 賛： 光村印刷

入 館 料： 前売券(販売期間/12月4日～1月2日)

一般 1,100円 学生 800円

当日券

一般 1,300円(1,200円) 学生 1,000円(900円)

★リピーター割引を実施します 本展半券チケットの提示で、次回入館料が割引

一般 1,300円→1,100円 学生 1,000円→800円

休 館 日： 毎週月曜日(祝日の場合、翌火曜日)

開館時間： 午前10時～午後6時(入館は、午後5時30分まで)

会 場： 細見美術館

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町6-3

TEL 075-752-5555 FAX 075-752-5955

<http://www.emuseum.or.jp>

総出品作品数:約140件

展覧会図録:「鈴木其一 江戸琳派の旗手」2,800円(税込) 仕様/A4変形サイズ・全340ページ

関連イベント ※有料・事前申込制

第38回 アートキューブクチャー
江戸琳派 狂画其一の挑戦

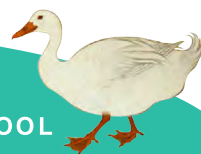
日時:2月5日(日) 午後2時～
講師:岡野智子(当館上席研究員)

古香庵 鑑賞茶会
其一好みの「白椿と楽茶碗」の取り合わせ

日時:2月11日(土)



鈴木其一「水辺家鴨図屏風」六曲一隻 細見美術館



琳派展19 鈴木其一 江戸琳派の旗手

2017年1月3日[火]－2月19日[日]

前期 1月3日[火]～1月22日[日] 中期 1月24日[火]～2月5日[日] 後期 2月7日[火]～2月19日[日]

展覧会 PICK UP ①

1. 月次絵の扇と画帖

十二の月を象徴する花鳥や景物、行事などを十二図に描く「月次絵」は、古来和歌の世界と密接に関わりあいながら描かれてきました。光琳や弟の乾山も「月次絵」を手掛けています。

其一には大々的な「十二ヶ月花鳥図」は見出されてませんが、扇や短冊、画帖などの小画面を十二図としてセットして描いた作品は少なくないようです。各画面は季節の情趣に満ち、上質な絵具を使用して華麗で多彩な表情をみせています。おそらくは臈眞筋への贈答品として制作されたこれらの作品は、いわばギフト用のプレミアムなダイアリーのように喜ばれたことでしょう。



鈴木其一「鏡餅と鼠図扇面」
一面
鴻池合資会社資料室



鈴木其一「十二ヶ月図扇」(七月 花扇)
十二本のうち
太田記念美術館

2. 掌中の愉しみ

江戸琳派ではしばしば、掌に乗るような小さな作品を手掛けました。普通の大きさの掛物をそのまま縮小したようなミニサイズの掛軸、縦十センチ前後の巻物、片手に収まる画帖など。これらはいずれも極めて高価な顔料で精緻に描かれ、小画面ながら見応えのある作品ばかりです。こうした趣向は其一が主に先導したようですが、鶯蒲や孤邨にも作例があり、抱一没後の江戸琳派の画家たちの間で共通の好みであったことがわかります。小さな世界に込められた雅趣と洗練は、其一を筆頭とする江戸時代の心意気なのです。



鈴木其一「梅鉢草図香包」一枚 個人蔵



鈴木其一「四季歌意図巻」(部分) 四巻のうち冬 細見美術館



3. 節句掛と描表装

其一の江戸琳派ブランド化戦略において、光琳・抱一画風のリピートとともに有力だったのが、当時「際物」と呼ばれた節句物です。節句の調度は期間限定の使用につき、従来一度で破棄すべき詠えものとして比較的簡易に制作されてきました。

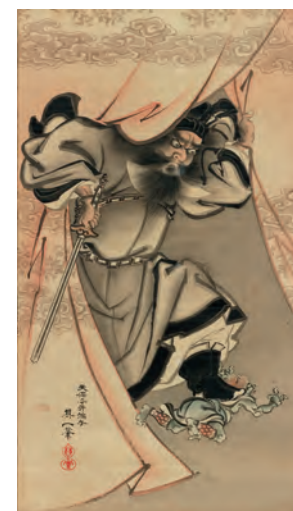
こうした節句の掛物「節句掛」は多くの画家が手掛けるいわば季節商品でしたが、其一は新春、雛や端午の節句掛、ひいては羽子板や凧までも美しく整え、大名家や豪商の贈答品として抜きん出て多くの需要を得たのです。

節句掛の中には、本絵の周囲の表装部分まで絵画として描く「描表装」(絵表具・画表具ともいう)を施した作例もありました。描表装は、古来仏画に試みられてきたもので、抱一も仏画において取り入れています。

其一は節句掛にこれを起用し、さらに草花図や物語絵、歌仙絵へと展開していきます。その趣向は鑑賞者に二重の楽しみを提供するだけでなく、其一の美意識を存分に発揮する場ともなりました。現代にも通じる其一デザインの豊穡な魅力がこれらの描表装に尽されています。



鈴木其一「鍾馗・神功皇后・武内宿禰」三幅対 個人蔵



鈴木其一「立雛図」
一幅 個人蔵

琳派展19 鈴木其一 江戸琳派の旗手

2017年1月3日[火]－2月19日[日]

前期 1月3日[火]～1月22日[日] 中期 1月24日[火]～2月5日[日] 後期 2月7日[火]～2月19日[日]

展覧会 PICK UP ②

— 細見コレクションと其一 —

其一を見出した細見コレクション

其一と細見コレクションの関わりは、今から半世紀ほど前に遡ります。琳派といえば宗達、光琳が名を馳せていた頃、細見コレクションでは抱一、其一らまだ評価の定まっていなかった江戸琳派の作品を積極的に蒐集。江戸琳派全般にわたる層の厚いコレクションを築き上げました。

中でも其一の作品は30点余りに及び、世界でも有数です。「藤花図」や「朴に尾長鳥図」など、一部は其一の代表作としてかねて高い支持を得ていましたが、今回の大回顧展では知られざる名品も多数出品します。

清明な其一の作風をこよなく愛し、今日の江戸琳派ブームの先駆けとなった細見コレクション。その礎のもと、多くの優れた其一作品をお迎えする本展は、まさに当館ならではの視点や競演をお楽しみいただけることと確信しております。



鈴木其一「歳首の図」一幅 細見美術館



鈴木其一「白椿に茶碗と花鉢図」一幅 細見美術館



鈴木其一「藤花図」一幅 細見美術館



鈴木其一「水辺家鴨図屏風」六曲一隻 細見美術館